

【 復活のトロパリ 第5調 】

しんじゃよ、ちちとせいしんとともにはじめ
 信者 父 聖神 共 始

なきことばわがすくいのためえに
 言 吾 救 爲

どうていぢょよりうまれしものをほめうとて
 童 貞 女 生 者 讃 歌

おがむべし、かれあまんじてそのみにて
 拜 彼 甘 其 身

じゅうじかにのぼおりしをしるのびそのこ
 十 字 架 上 死 忍 其 光

うえいのふくかつにてしせしものを
 榮 復 活 死 者

ふくかつせしめたまあえばなあり。
 復 活 給

【 日本の聖使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
 使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
 實 神 智 役 者 聖

なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい
 神 撰 笛 愛

にみちたるうつわ、わがくにのこう
 満 器 我 國 光

しよ お しゃ、あしとしゆきょうせいニコライ
照 者 亜使徒主教聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および
爾 羊 群 爲 及

ぜんせかいのため、いのちをたもうせい
全世界 爲 生 命 賜 聖

さんしゃにいのりたまえ。
三者 祈 給

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが
成 聖 者 亜使徒聖 我

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ
國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの
爾 初 我 國 於 己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの
外 來 者 知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて
光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか
屬 神 子 爲 彼 等 神

みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
恩 寵 與 教 會 建

た り 、 い ま こ の きょう か い の た め に い の り
 今 此 教 會 の た め に 祈
 た ま あ え 、 け だ し わ れ ら そ の しよ し は なん
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾
 ち に よ ぶ 、 わ が よ き ぼ く しゃ よ 、 よ ろ こ
 呼 我 善 牧 者 慶
 べ よ 。

【 復活のコンダク 第5調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き い
 光 榮 父 子 と 聖 神 に 歸
 す 、
 わ が きゅう せ い しゅ 、 ひ と を あ い す る しゅ
 我 救 世 主 人 愛 主
 よ 、 なんぢ は ぢ ご く に く だ あ り 、 ぜん 全
 爾 地 獄 降 あり 全
 の う しゃ と し て そ の もん を や ぶ り 、 ぞ う
 能 者 其 門 壊 造
 せ い しゅ と し て 、 し しゃ を お の れ と と も に
 成 主 死 者 己 偕
 ふ く か つ せ し め 、 し の は り を く じ き
 復 活 死 刺 折

アダムのろいよりときたまえり。ゆえに
 罪 釋 給 故
 われらみなよぶ、しゅよ、われらをすくい
 我等皆呼 主 我等救
 たま あ え 。
 給

【 税吏とファリセイの主日のコンダク 第3調 】

いまもいつもよよにい、アミン。
 今 何時 世 世
 われらつみなるものはぜいりのたんそくをしゅ
 我等罪 者 税 吏 歎 息 主
 にささげて、しゅさいたるものにつか
 捧 主 宰 者 就
 けだしかれはしゅうじんのすくいをのぞおみ、
 蓋 彼 衆 人 救 望
 ことごとくのかいするものに
 悉 痛 悔 者
 ゆるしをたもお。ちちとどうむげんなるかみ
 赦 賜 父 同 無 限 神
 にして、われらのためにじんたいをうけ
 我等爲 人體 受
 たればなあり。

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行おう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 もつわれらのぞわれらおよじゆうじゆうつみゆるわたましいからだ
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世
 に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖神 聖 勇 毅 聖

じょうせいのもものよ、われらをあわれめ
 常生 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
 常生 者 我 等 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
 めよ。こうえいはちちとことせいしん
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 せいなるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを
 あわれめよ。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第5調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、斯の世より永遠に至らん、

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
 主 爾 我 等 保 我 等 護
 りて、このよおよ り えい えんにいい
 斯 世 永 遠 んに 至
 た ら ん。

誦經) ^{しゅ われ すく たま けだしぎじん た} 主よ、我を救い給え、蓋義人は絶えたり、

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
 主 爾 我 等 保 我 等 護
 りて、このよおよ り えい えんにいい
 斯 世 永 遠 んに 至
 た ら ん。

誦經) ^{しゅ なんぢ われら たも われら まも} 主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、

このよおよ り えい えんにいい た ら ん。
 斯 世 永 遠 んに 至

【 ^{アポστόロス} 使徒經 296 端 ティモフェイ後書 3 章 10～15 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと たつ こうしょ よみ} 聖使徒パヴェルがティモフェイに達する後書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{こ なんぢ わ きょうくん ひんこう いし しんこう かんよう じんあい にんたい わ} 子ティモフェイよ、爾は我が教訓、品行、意志、信仰、寛容、仁愛、忍耐、我が

アンティオキヤ、イコニヤ、リストラに在りて遇いし ^{あ あ} 所の窘逐、及び苦難に於て、我に ^{ところ きんちく およ くんなん おい われ} 従

えり、此の窘逐は我之を忍び、主は我を ^{こ きんちく われこれ しの しゅ われ ことごと そのうち すく およ けいけん もつ} 悉く其中より救えり。凡そ敬虔を以て、

ハリストス イイススに在りて 生 を度らんと欲する者は、皆 窘 逐せられん。悪しき人、及び
 人を欺く者は、益 悪に進みて、人を惑わし、自 も惑わされん。然れども 爾 は學
 びし 所 の、及び 爾 に託せられし 所 に居れ、爾 誰より學びしかを知らばなり。且 爾 は
 幼 より聖書を知る、即 善く 爾 に、ハリストス イイススに於ける信に由りて、救 を
 得しむる智慧を與うる者なり。

(比較用 口語訳) あなたは、わたしの教、歩み、こころざし、信仰、寛容、愛、忍耐、それから、わたしがアンテオケ、イコニオム、ルステラで受けた数々の迫害、苦難に、よくも続いてきてくれた。そのひどい迫害にわたしは耐えてきたが、主はそれらいつさいのことから、救い出して下さったのである。いったい、キリスト・イエスにあって信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける。悪人と詐欺師とは人を惑わし人に惑わされて、悪から悪へと落ちていく。しかし、あなたは、自分が学んで確信しているところに、いつもとどまっていなさい。あなたは、それをだれから学んだか知っており、また幼い時から、聖書に親しみ、それが、キリスト・イエスに対する信仰によって救に至る知恵を、あなたに与えうる書物であることを知っている。

【 アリルイヤ 主日第5調 】

司祭) 爾 に平安、

誦經) 爾 の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) アリルイヤ、

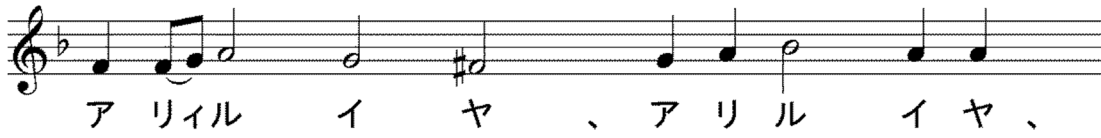
Arieleia, Arieleia,
 Arieleia.

誦經) 主よ、我 永く 爾 の慈憐を歌い、我が口を以て世に 爾 の眞實を傳えん、

Arieleia, Arieleia,



誦經) ^{けだしわれい じれん なが た なんぢ なんぢ しんじつ てん かた} 蓋 我言、慈慈は永く建てられたり、爾は爾の眞實を天に固めたり、



司祭) (^{ひと あい しゅさい わ ころろ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

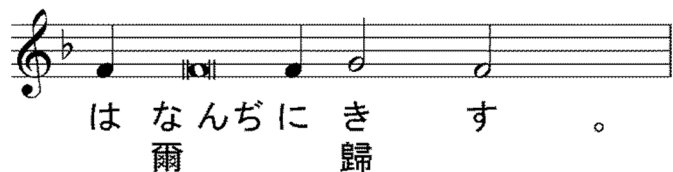
^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 ^{エヴァンゲリオン} 福音經 ルカ福音書89端 18章10~14節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) ^{つつし き しゅ さ たえ もう い にんきとう ため でん のぼ ひとり} 謹みて聴くべし、主は左の譬を設けて曰えり、二人祈禱せん爲に殿に登れり、一は

ひとり ぜいり た おのれ うち か いの かみ われなんち かん
ファリセイ、一 は税吏なり。ファリセイ立ちて、己の衷に斯く禱れり、神よ、我爾に感

しゃ われたにん ざんこく ふぎ かんいん ごと あるい こ ぜいり ごと もつ
謝す我他人の残酷、不義、姦淫なる如く、或は此の税吏の如くならざるを以てなり。

われひとぬか ふたたびものいみ およ う ところ じゅうぶん いつ ささ ぜいり とお た
我一七日に、二次 齋し、凡そ得る所の十分の一を獻ぐと。税吏は遠く立ちて、

あえ め あ てん あお すなわちむね う い かみ われざいにん あわれ われなんち
敢て目を擧げて天を仰がず、乃 膺を拊ちて曰えり、神よ、我罪人を憐めと。我爾

ら つ こ ひと か ひと ぎ いえ かせ けだしおよ みづか たか もの
等に語ぐ、此の人は彼の人よりは義とせられて、家に歸れり。蓋 凡そ自ら高くする者は

ひく みづか ひく もの たか
卑くせられ、自ら卑くする者は高くせられん。

(比較用 口語訳) 「ふたりの人が祈るために宮に上った。そのひとはパリサイ人であり、もうひとは取税人であった。パリサイ人は立って、ひとりでこう祈った、『神よ、わたしはほかの人たちのような貪欲な者、不正な者、姦淫をする者ではなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します。わたしは一週に二度断食しており、全収入の十分の一をささげています』。ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天にむけようとししないで、胸を打ちながら言った、『神様、罪人のわたしをおゆるしてください』と。あなたがたに言うておく。神に義とされて自分の家に帰ったのは、この取税人であって、あのパリサイ人ではなかった。おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう」。

しゅよ、こうえいはなんちにきし、こうえいは
主 光 榮 爾 歸 し、光 榮
はなんちにきす。
爾 歸

※ 聖体礼儀③ (金口イオアン) へ